

第16回パネル展 鹿児島

2009年12月



会場の県民交流センター



桜島が噴火



鶴のアーチ



鹿児島会場風景



鹿児島会場風景



鹿児島会場風景

南日本新聞200年12月8日



「展示で自殺問題について多くの人に知ってもらいたい」と語る伊福達彦理事長
—鹿児島市のかごしま県民交流センター—

過労自殺防止願い展示

50人の遺書、日記切々

職場での過労やストレスが引き金となり、うつ状態になって自殺した50人の遺書や生前の写真を集めた「私の中で、生きているあなた」展が10日から、鹿児島市のかごしま県民交流センターで始まる。12日まで。

きょうから県民交流センター

主催、「自殺を社会問題として訴え、みんなは考えてもらいたい」と全国で巡回しており、鹿児島は初めて。会場には過密勤務に悩み、「仕事を続けていく気力も体力もない」などつぶった小児科医の中原利郎さん(当時44、東京都の遺書や、「会社に迷惑かけていると思うなら、自分から身をひいたらどうや」と上野(伊福達彦理事長)が

さん(当時56、兵庫県の日記などを展示。遺族の手記もある。

今回、鹿児島市の30代の自営業男性も自殺した妹の遺書などをパネル展示した。男性は「残された者は一生つらい思いを抱えていく。展示で自殺を踏みとどまってくれん」と話して、

10日午後は中原医師の妻のりりさんが会場を訪れる。入場無料。午前10時、午後6時(最終日は午後5時)。

第3種郵便物認可

悲劇繰り返さないで

過労やうつで自殺 50人の写真など公開



過労で自殺した夫や家族の写真を見つめる中原さん—鹿児島市山下町

「怒られるのも苦しい訳すのも殺しました」「キキキキ」など叫ぶ声が響く。過剰な労働を働いたことと過労やうつになり、自ら命を絶した人たちの生前の写真や遺書を集めたパネル展「私の中で、生きているあなた」が10日、鹿児島市山下町の県民交流センターで始まった。「悲劇を繰り返さない」。遺族の強い願いが詰まっています。12日まで。

大阪のNPO「残した言葉読んでみて」

全国自死遺族連絡会と連携して、2007年4月の京都府での開催を皮切りに、全国で開催している。パネル展では遺族の協力を得て過労やうつ状態に陥った、自殺をした50人の実名だけでなく、遺書や手紙も併せて展示している。音楽教師なのに英語の授業を受け持つよう強制されるなど、「パワーハラスメント被害を訴える遺族を通じて06年に自殺した鹿児島市の女性中学教師(当時20)の写真も展示されている。伊福理事長は「元氣な人の写真を見て、残した言葉を読んで、なぜか生きて生き生きとした人たちが自ら命を絶したのには驚き、話したのか考えてほしい」と話している。この日は、09年に自殺した総合病院の小児科医(当時44)の妻、中原利子さん(53)東京都中央区IIが訪れた。夫は職の机に「少子化と産後うつをさまで」を遺した遺書を残した。小児科医の妻という肩書きが少ない人々の過剰労働を強いられた左は「この開催の

朝日新聞200年12月9日

中で私には医師という職業を誇っている方にも力もありません」と書き残して

07年、夫の自殺は過労による。だが、病院の首脳は高裁で認められては、現在最

高裁争われている。現在最

は「泣き入りしている

遺族もたくさんいる。大層な

人いる。そんな人たちの手伝

いをしていける」と、涙を

浮かべながらも懸命に話し

た。

警察によると、07、08年

の県内の自殺者は合計11

1人、うちうつ病が原因の

考えられるのが約2人、職

場の人間関係が引、県庁寄

福祉課の担当者「自殺の原因

は特筆すべきの難しい、職

場の業務が重なり、家庭内

の不和が出ていることもあ

り、またそのほかあつて原因

が遺族の」と指摘する。

今年8月、県内にも自殺

の会(わかさの会)が、

ころの会の会、が、

た。回復を話せる場が県

内にあつて、行政の

支援が必要なのは、

「

話した。